



## 破綻するアメリカ 会田弘継 著

岩波書店 (2017年12月) 2,500円+税 / 296ページ

# 一人一冊



評者



津田塾大学  
学芸学部 教授  
**西川 賢**

## 混迷する米国を描いた名著

英国の高名な歴史家だったE.H.カーが名著『歴史とは何か』の中で語った、次の一節は有名である。「歴史とは歴史家と事実との間の相互作用の不断の過程であり、現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話なのであります」。

われわれはまだトランプ政権に本格的な歴史的评价を下す段階にはない。だが、トランプ政権について、同時代的な評価を加えることは可能であり、すでに多くの論考が発表されている。会田氏による本書『破綻するアメリカ』は、思想史の立場からトランプ政権に同時代的評価を与えることを試みた優れた著作である。

トランプが、経済ナショナリズム、反グローバルイズム、人種主義、政治的正しさや科学的実証主義への反発など、これまでの共和党の伝統的な立場とは一線を画する主張を掲げていることは周知の事実である。会田氏によれば、これは現状に対する単なる衝動的反動ではない。

「トランプイズム」が生み出された原因として、著者は社会・経済の変化とともに、思想的理由を指摘する。例えば、トランプを支持する「オルタナ右翼」は、主として

行き過ぎた政治的正しさへの反発が生み出したものであり、多文化共生を無批判に妄信するリベリズムへの反動とみることもできる。だが、それがトランプ台頭の理由のすべてではない。トランプイズムは、共和党を長らく支えてきた経済的自由放任を是とする従来の保守主義が人々の支持を失い、機能不全に陥ったことの帰結でもある。

このように、現在の米国では左右のイデオロギーの双方、すなわちリベリズムと保守主義がともに思想的活力を失って硬直化し、国民の期待に応えるものではなくなってしまった。いわば、トランプイズムは米国の思想的行き詰まりが生み出した「鬼子」でもあるのだ。こうした状況の下、本書で紹介されるジュリアス・クレインやマイケル・アントンのように、トランプイズムを利用することで硬直化した保守主義を刷新し、新たな思想・イデオロギーを作り出す契機（思想再編）につなげようと試みる野心的思想家も存在する。

「鬼子」を取り込んでいくことで、米国に新たな思想が生まれるのか、トランプイズムは「米国史における新たな思想的革命」の幕開けなのか——このような暫定的な評価に別の批評を加えていくことこそ、後世の歴史家が取り組むべき仕事である。まさに今、われわれは「対話」すべき歴史的問題を突きつけられているのかもしれない。